宇都宮市教育センター **かすたネット通信** 第４２号
令和6年4月10日発行
発行者 所長 飯田 高広

なくて七癖　話し方の癖

前号では，子どもたちの視覚へのアプローチとして，教師の顔について取り上げました。今回は，聴覚へのアプローチとして「話し方」について取り上げます。「話す内容」とは区別され，「非言語」の部類に入るものですが，次のような様々な要素があります。

声のトーン　声の大きさ　話す速さ　イントネーション(抑揚)　アクセント
発音の明瞭さ　語尾の強弱･伸び･上げ下げ　間の取り方　鼻･喉鳴らしや咳払いの多さ
「えー」「えっと」「あの」「ちょっと」「まあ」「ま」「…ね」「はい」「で」など“つなぎ言葉”の多さ

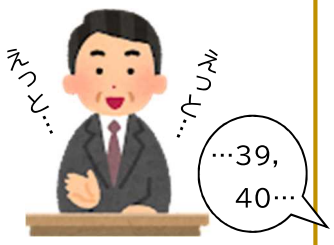
「子どもたちにとって耳ざわりの良い話し方となるよう，これらに留意して話しましょう」

などと言うと，まるで初任研の最初の内容みたいですが，教師の話し方には一人一人特徴があり，それがその教師のもち味でもあり，子どもから見た教師の人物像の大きな構成要素になっています。むしろキャリアを積んだ方が，特徴が色濃くなっている人もいるでしょう。たとえボイスチェンジャーで声質を変えたとしても，「〇〇先生の喋り方だ」と当てられるかも知れませんね。それが子どもの耳に心地良く響けば良いのですが，聞き取りにくさや生理的に不快感を感じるような強い癖である場合は修正が必要です。

とは言え，自分では無意識なことが多く，また，キャリアを積むほど他者から指摘しにくくなるため，結果として放置されがちです。聞く側にとっては，気になり始めた時点からずっと気になり続け，集中して聞くことや学習活動への意欲が減退するだけでなく，その教師に対する感情までがネガティブになってしまうおそれがあります。

上記□の中で，私たちが教室訪問していて時折気になるのが，**大きな声での一本調子の話し方**です。最後列でも十分に聞こえる声量を大幅に超え，もはやうるさいレベルで話し続けるケースです。子どもたちのざわつきに負けないために意図的にそうしている場合もあれば，そもそもの地声が大きい場合もありますが，常時大音量に晒され，それに慣らされてしまう環境は，教育の場として適切とは言えません。

もう一つは，「えーと」「あのー」「まぁ」などの**意味のないつなぎ言葉（フィラー）の過剰な使用**です。ある研究では，フィラーの多用は，聞く側が話し手に寄せる親近感や信頼感，能力評価などを低めてしまうリスクがあり得るとされています。



また，授業が延びる，予定の内容まで終わらない，朝の会が長引いて１校時に食い込む，帰りの会が延びて全校・学年の下校に支障をきたす…，これらが頻繁に起こる場合，多くは**話が丁寧過ぎたり無駄に繰り返されたり**して時間を浪費していることによります。授業では最初の話（説明）が長過ぎて主たる活動の時間が短くなり，終わりのチャイムが鳴る頃にようやく活動の佳境に入るも，終了を余儀なくされ，まとめや振り返りは省略というパターンです。これも必要以上につい話し過ぎてしまう，一種の癖と言えるでしょう。

「聞く姿勢ができていないから」「落ち着かない子が邪魔するから」ということもあるでしょうが，**教師の話し方にも一因があって，忖度や我慢が苦手な子（感じるままに素直に反応する子）が落ち着かない（落ち着けない）のかもしれない**という視点も意識したいものです。

学校生活適応支援アドバイザー（飯山･大瀧）
TEL　639－4392